

製造工業生産予測指数の実現率

竹光 大士

実現率とは

製造業等の動向から景気を把握する統計として、鉱工業指数があるが、今回は製造工業生産予測指数の実現率について考えてみたい。この数値は「今回調査による前月実績指数/前回調査による当月見込み指数」をもとに算出され、前回の見込値がどれだけ実績となったかを表したものである。

一般的には、景気の山を通過しても、しばらくは企業が強気の生産見込みを維持するため、実際には低下を始める実需に追い付かず実現率がマイナスへと変化。反対に、谷を通過すると実現率はプラスへと変化する。このように、実現率は景気のサイクルに沿ってプラス、マイナスを繰り返すとみられている。

実現率の特徴

ただ、実際には、実現率は下振れする傾向がある(図表1)。08年以降の製造工業の実現率はこの間、景気拡大期の方が長いにもかかわらず、平均で1.8%となっている。予測指数は基本的に楽観的なバイアスのある指標と言えるかもしれない。また、リーマンショックと東日本大震災が発生した局面では実現率が大きく低下したが、これは想定外の事態による特殊要因であろう。

ここでは、3業種をピックアップして実現率の特徴を考えてみた。はん用・生産用・業務用機械工業は、平均マイナス幅が大きい業種である(4.1%)。他業種に比べ09~11年(平均4.8%)の弱さが目立つことから、同時期に進行した円高により、設備投資の先送りが起こったことが生産下振れにつながった可能性がある。

次に、電子部品・デバイス工業の実現率は大きく上下に振れる傾向がある。これは、当業界特有のもので、生産が市況に左右されやすいことが挙げられる。特に、12年前後(12年の平均3.6%)は需要減退の中、国内大手半導体メーカーの破綻等が起こったことから、業界全体が混乱し、実現率も大きく振れたとみられる。

一方、輸送機械工業は、東日本大震災発生直後を除くと、実現率が平均するとゼロ近辺で振れも小さく安定的に推移している。これは、計画的生産やサプライ・チェーン・マネジメントが徹底されており、生産数量の修正が少ないからだと考えられる。

なお、想定外の需要減が起きたとみられ、消費税増税後(5月以降)から9月にかけて実現率は大きく下振れしている。

図表1 景気の山、谷及び増税後の3ヶ月間の平均実現率 (%)

業種/日付	谷	山	増税	7年間平均	除く震災
	09年3月	12年4月	14年4月	08年1月~14年10月	08年1月~14年10月
期間	09年4月~6月	12年5月~7月	14年5月~7月	08年1月~14年10月	11年4月~5月を除く
製造工業	0.2	1.7	2.3	1.8	1.6
はん用・生産用・業務用機械工業	3.0	3.5	4.7	4.1	3.9
電子部品・デバイス工業	7.1	3.1	1.6	1.2	1.1
輸送機械工業	1.7	0.3	0.8	1.1	0.1

(注)12年4月の山は暫定
(資料)経済産業省、内閣府